

# いたち川の自然・今昔

小林 英俊

## はじめに

「螢川」を書いた宮本輝さんがいたち川の雪見橋のほとりに住んだのは今から丁度30年前の昭和33年のことです。昭和61年に行われた科学文化センターの「いたち川自然環境調査」の結果により明らかとなった現在のいたち川と比べながらその頃のいたち川のことを思い出してみることにします。

昭和30年代はまだ戦後の復興期で大人も必死で生活していたし、まだ生活もまずしかった時代です。テレビもめずらしく、もちろんファミコンもありませんでした。子供たちは学校から帰ると外でカンケリや手つなぎオニゴッコをしたり、自然を相手に遊ぶのが日課でした。街に住んでいた子供たちにとっていたち川は貴重な遊び場であり、また自然や生き物達との触れ合いの場でもありました。

特に狩猟本能のある男の子の多くは魚採りにいくのが楽しみでした。「魚しゃくりに行くか!」が合い言葉でランドセルを放り投げて小さな手網とバケツを持って川へ出かけたものです。

## 川の様子

今のいたち川はコンクリートの護岸で整備され、土手もブロックで化粧されたり芝が植えられて河川公園として美しくなっていますが当時の土手は文字通り土のままで、夏になると雑草が生い茂っていました。また川幅も今よりずっと広く、所によっては川原があって相撲場がつくってあったりしました。(表紙写真参照)

橋は当時でも鉄筋コンクリートの「永久橋」が多くなっていましたが、まだところどころに木の橋が残っていて、木製の欄干の間から子供でも川面を見ることができました。何日も雨が降らないのに断え間なく流れる水を不思議に思ったりしたものです。コンクリートの欄干では子供にとって川面をのぞくことはできませんでした。

川の流れも、今は両側のコンクリートの護岸によって半ば排水路状になってしまい早瀬が連続し

大人が入っても流されそうな状態になっていますが、昔はゆったりと蛇行して浅瀬や淵が交互にある自然な流れでした。

現在は小学生が川に近づくことは禁じられているようですが、当時はそんなことは誰も言いませんでしたし、また岸辺近くには浅瀬も多く子供が川に入ってもそれほど危険ではなかったのでしょうか。

子供の世界も今と違って縦の社会で六年生のボスが低学年の子供に「男なら向岸まで渡ってみろ」と命令し、みんなこわいながらも半ズボンさらたくし上げて浅瀬をたどって川に入っていたものです。川遊びの手ほどきを年長者から受けていたから深い所や身体が流されそうになる流れの速いところもみんな知っていました。

## 水草や魚のこと

今も水草が見られますが、その頃はもっと水草が多く生えていました。また水草の種類も少し違っていたようです。はっきりした記憶ではありませんが、冷たいきれいな水を好むバイカモが一番多くて、クロモ、フサモ、エビモなどもたくさん生えていました。今回の調査で見つかったコカナダモやオオカナダモはなかったようです。

そんな水草の生えている所や岸辺の挺水植物の生えているところを手網でしゃくると小魚が面白いように採れました。

一番多く採れたのはコブナとドジョウでした。



バイカモ

フナにはギブナとキンブナ両方がいましたがその他に「ドス」とか「ドブナ」と呼んでいた腹部やエラブタのところが赤黒いものも10匹中1~2匹取れたものです。今から考えてみるとウロコが透明なため血管が透けて見える透明鱗タイプのものだったのでしょう。

ドジョウも普通のドジョウとシマドジョウ両方がたくさんいたものです。

コブナに混ってコイの稚魚も時々手網に入って自慢の種になっていました。コイは小さいとフナとよく似ていましたが小さくても立派な口ひげがあることが目じるしで、たくさんフナを一匹ずつ手に取って調べてヒゲのあるのを見つけると実にうれしかったものです。

またどこから逃げたのかヒブナやニシキゴイそれにウロコが特殊なドイツゴイも時折見られ、橋の上からもそれとわかるとあわてて網を取りに行き追っかけたものでした。

今は放流された大きなニシキゴイは見るができますが、フナやドジョウそれに野生のコイもたいへん少なくなってしまうようです。

ゆるやかな流れにしか住めないメダカもかつては岸辺の浅瀬にたくさんいたのに今回の調査では見つかりません。その他には「グズ」とか「グズアンマ」とか呼んでいたハゼの類も手網に入ったものです。

いくつかの種類を含んでいたのですが、おそらくウキゴリとヨシノボリではなかったかと思われます。また数は多くありませんでしたがナマズもいました。稚魚も採れましたからいち川でも繁殖していたのでしょう。ウナギについては私自身は見た記憶はありませんが、西大泉の長澤英明さんは昭和30年以後も獲ったことがあるそうです。

川底の泥や砂の中にはヤツメウナギの類も住んでいました。ヤツメウナギの仲間は2種類あって一生を川で過ごすスナヤツメは成魚になっても20cm以下ですが、一度海に下って成長し産卵のため川を遡上するカワヤツメは50cm以上の大きなものになります。当時スナヤツメはすなぐりと呼ばれ、カワヤツメはやつめうなぎと呼ばれ区別されていました。

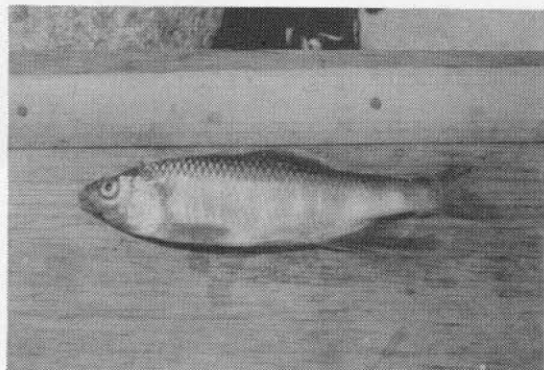
もともといち川にはカワヤツメが多かったよ

うです。大泉の堀田義治さんのお話しでは、通呼「ドンドコ」と呼ばれていた大泉の堰の早瀬で遡上するカワヤツメが多数見られ、月夜には石に吸いついて流れにゆれる白い腹部が目立って、素手で採ることができたそうです。一晩でバケツに一杯になったこともあったとか。また湧水の多かった大泉近辺の砂地のところにはスナヤツメも多く、戦後の食料不足の時期にはスナヤツメを採っててり焼きを作り商売にしていた人もいたということです。このヤツメウナギの仲間も今回の調査では見つかりません。

富山ではウゴイと呼んでいたウグイは昔も多く、岸辺の浅瀬では無数の稚魚を採ることができました。しかし大きなものはもっぱら釣の対象でした。竹竿にテグス糸のない時は本綿糸をゆわえてエサはミミズやハエ、クモ等をつかまえて釣ったものです。適応力の強いウグイは今も健在のようです。

最近多くなったと思われる魚もいます。それはオイカワです。今回の調査では市街地の中で一番多い捕獲数となっていますが、昔は中流域では見たことがありませんでした。(堀田さんによると、ドンドコの上流には戦前から少数見られたとのこと)オイカワは元々琵琶湖産で、アユの稚魚の移入によって県内に広まったものですが、当時すでに牛ヶ首用水には多数見られました。早瀬ばかりの川でも繁殖できるため現在のいち川では勢力を伸ばしているのでしょう。

食べておいしいアユは昔も一番人気のある魚でしたが手網では採れず、大人は毛バリで釣っていましたが、仕掛を持たない子供にとっては手の届かない魚でした。橋の上からも石や割れたちゃんねの廻りで泳いでいるのを見ることができました。



オイカワ

鱈寿司に使われるサクラマスやサケは、当時もほとんど見られなくなってしまっていました。

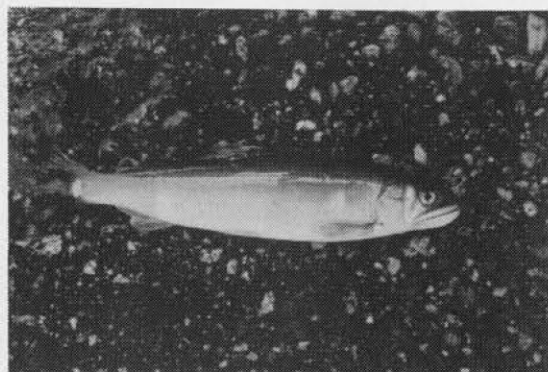
堀田さんによると戦前にはマスもサケも遡上したそうで、見つけるとクワでどついて捕ったとのこと。戦後では、布瀬の吉田信さんは昭和30年頃に山室中学の近くの筏川で一度だけマスを採ったことがあるそうです。以後マスが見られることは無かったのが、西大泉の長澤英明さんの話しでは昭和60年になってそれこそ30年ぶりでした。川にマスが遡上し2匹採れたそうです。下流部のパルプ工場の排水がなくなったためや、稚魚の放流の効果が出てきたためかもしれません。

### カエルやカメ

いたち川には魚のほかにもたくさんの生き物が住んでいました。近ごろはカエルの姿は見られなくなり、学校での解剖の材料にも困るようになっていっていますが、昔のいたち川の夜はカエルの鳴き声がうるさいくらいでした。手網でしゃくると魚よりオタマジャクシが多く入るくらいでした。多かったのは土色で皮膚にイボイボのあるツチガエルとトノサマガエルでした。土手の草むらにはアマガエルもたくさんいました。またどこからやってきたのか大きなヒキガエルが見つかり話題になったりもしました。川原の水たまりには春になるとカエルの卵がたくさん見られ、学校に持って行って飼育したものです。

カエル以外の両生類ではアカハラと呼んでいたイモリが採れることもあって子供達を気味悪がらせたものです。

カエルの仲間は流れのない止水域に卵を生むため現在のいたち川ではもう住めなくなりました。



ア ユ

カエルが多かったため土手や石垣の間にはアオダイショウやシマヘビも住みついていた。

今もいたち川の川清掃の時にアオダイショウが見られることがあるようですが、カエルのいなくなった現在は何を食べているのか、少々不思議です。ドブネズミでも餌にしているのでしょうか？

爬虫類ではカメも住んでいました。たぶんクサガメだったと思われますが、松川との合流点あたりに多かったようです。

また土手の草むらや石垣のところにはカナヘビも多く見られました。しかし呉羽山で見かけたトカゲはいなかったようです。

### 虫たちのこと

手網に入ったもののもう一方の代表は水生昆虫でした。

岸辺のゆるやかな流れの水面にはアメンボやミズスマシがたくさんいました。今はゲンゴロウやガムシといっても知らない子供が多いと思われるのですが、夏の夜には家の明りに飛んで来るほど多くいたものです。また岸辺の水草の間にはミズカマキリやタイコウチが必ずといってよいほど見つかりました。メダカと一緒に水槽に入れて飼っているとうまく魚を捕えるのを見ることができました。

今回の調査で昔と大きく違ったのはヤゴの類の少なさです。それは当然トンボの生息状況と一致します。昭和30年代のいたち川はトンボの豊庫でした。春四月になるとサナエトンボの仲間が羽化し始め、シオカラトンボやアキアカネに続いて初夏にはギンヤンマやオニヤンマが次々に羽化しトンボはいたち川の川面を支配していました。

岸辺に生えていたキハナショウブの葉やコンクリートの橋脚などにヤゴの抜け殻がたくさんついていました。小学生にはなかなか採ることのできなかったギンヤンマも早朝羽化したばかりのものであれば簡単に採ることができました。

また川面の表情を豊かにしていたものにハグロトンボやイトトンボの仲間がいました。特にハグロトンボは「オハグロ」と呼ばれており魚採りに川原に近づくと岸辺の草むらからひらひらと飛び立ち水面ぎりぎりの低空を対岸に向かって逃げていく姿はなんとも愛らしいものでした。またイトトンボの仲間も数多く、水面のバイカモの花やもり上るまでに繁茂したエビモの島に止っていたり



するとサファイアブルーの小っちゃな宝石でした。

昆虫といえばもちろんホタルを忘れるわけにはいきません。小説「螢川」ではずっと上流でのホタルとの出会いが描かれていますが、映画のラストシーンの乱舞ほどではないにしても、当時すでに市街地となっていた雪見橋の周辺でもゲンジボタルやヘイケボタルが少なからず見られました。

5月から6月にかけての新月の夜によくホタル狩りに行きました。土手には子供の背たけより高い草が茂り自分のいる側のホタルは見えにくく対岸のホタルがよくわかりました。そこで二組に分かれてお互に対岸の光を「もっと右、もう少し下の方」などと光の位置を教え合って獲ったものです。つかまえそこなうと、ふっと飛び立ち川面を対岸まで飛んでいってしまいやすい思いをしりました。

「螢川」が有名になって、ホタルを放す試みが行われたりしましたが、いたち川にホタルがよみがえるためには護岸のコンクリートをやめ、巻貝の住める水質にするとともに、夜の暗闇を復活させなければ不可能でしょう。

夏になり鳴虫のシーズンが来るとスーチョン（ウマオイ）やセスジツユムシ、クサキリなどの鳴声が瀬音に混ってあたりをつつでいました。

自然植生の残っていた土手は狭いながらも陸生昆虫たちの豊庫でもあったのです。

土手に生えていたカナムグラやカラムシ、ヨモギの葉を巻いてキタテハやアカタテハ、ヒメアカタテハの幼虫がひそんでいました。

水ぎわにたくさんあったミゾソバや土手の道ぞいにあったあかまんま（イヌタデ）、それに外来種であったヨーシュヤマゴボウの実は女の子のママゴトの材料になっていたこともなつかしい思い出となっています。

#### カイやカニのこと

ホタルが多かったくらいですから、川の中には巻貝の仲間がたくさんいました。カワニナが一番多かったようですが、大きなタニシ（マルタニシ？）や小さなモノアラガイも多数見られました。二枚貝は本流では見たことはありませんでしたが、現在市営プールになっているあたりの湧水を集める水路にはからすがい（たぶんドブガイ）がいてめずらしかった記憶があります。余談になります

すが、本流では二枚貝がいなかったためタナゴの類も当時は見ていません。ただ太郎丸の布村昇さんのお話しでは、松川の支流にあたる冷川や四ツ谷川にはドブガイとヤリタナゴらしいタナゴが棲んでいたとのことでした。

また、本流ではありませんが家のまわりの生活排水の流れる側溝には小さなドブシジミがたくさんいたことを思い出します。

なお布瀬の吉田信さんによると神通川のそばの用水にはマシジミがたくさんいたとのことなのでかつては富山市周辺には二枚貝の類も広く分布していたのかもしれません。

それからエビやカニの仲間も住んでいました。「川エビ」と呼ばれていたのはたぶんスジエビだったと思いますが流れのゆるやかな淵の石積のところなどで見られました。

また「川ガニ」とか「毛ガニ」と呼ばれたハサミに毛の生えているモクズガニや陸にも上がっていたベンケイガニもいました。

モクズガニはいたち川や松川でかつては食べるために大量に採られていたようです。

布瀬の吉田信さんによると戦前には松川にたくさんいて、自転車のリムを利用した受け網をつくり中央に魚のアラをくくりつけて川に沈め、カニが寄ってくるとそっと持ち上げ手網で受けるという漁法で一晩にバケツ一杯も採れたとのことでした。

ベンケイガニはいたち川の川原や石積の間にも見られましたが、むしろ家のまわりの側溝などの方に多くいたような気がします。カニは子供にとって興味深い生き物だったので、水槽に入れて飼っていました。



タニシ



## 鳥やコウモリ

冬のいたち川には今もユリカモメの姿が見られますが、かつてはもっと数も多く、大型のウミネコやセグロカモメもやってきました。川の近くの民家の屋根や橋の欄干に一列にとまっているのはみごとなくらいでした。

サギの仲間も来ました。日中はコサギ、夜になるとカラスのような鳴声を出す夜鳥ヨグラス（ゴイサギ）の声もよく聞かれました。

昭和30年代は市街地でもツバメがたいへんたくさんいました。通りに面する店屋さんの一つおきにツバメの巣があったくらいです。いたち川の川原は巣づくりの泥を採る場所として利用されていました。また、川面にはユスリカやカゲロウなどの昆虫が多く、エサ場としても大切な場所だったと思われます。

夕方になると、どこからともなくコウモリがたくさん飛び出していたち川の上空を飛び回ってユスリカを捕えていました。

家に巣をかけていたツバメは育雛の時期に1日に100匹を超えるトンボを運んできたのを観察することがあります。あんなにたくさんのツバメやコウモリなどが生活できるほどの生産力をかっていたち川は持っていたのです。

## おわりに

いたち川は人間が住む前は常願寺川の扇状地の伏流水を集めて流れる自然河川であったと考えられます。それが扇状地の水田化とともに灌漑用水路として除々に整備され、天正年間に佐々成政が開削整備して以来約400年間同じ姿を保って、富山に住む人々に親しまれてきました。

食料としての川魚採りはもちろんのこと、常願寺川を水源とするため流砂が多く、川砂採りをなりわいにする人が生活をしていたり、戦前ではカキブネと呼ばれていた料理舟が浮かび風流な遊びの場を提供し、市民の生活に密着していたといえ

ます。またここで思い出したように子供達にとっては遊び場でもあり、自然との触れ合いを学ぶ貴重な場所となっていました。

しかし豊かな自然を宿していたいたち川も昭和40年代に入ると、強力な農薬の流入と工場排水や生活排水による水質悪化のため一時期死の川となって魚の影も見られなくなってしまいました。水草もなくなり、汚れた下水に見られる水生菌しか生えていない状態が10年ほど続きました。

昭和50年代に入ると水質汚濁防止法による工場排水の規制が効果を現わし始め、また下水道の整備が進むにつれて、水質は改善され、再び魚の棲める川に復活しつつあります。

しかし、一度失われた生態系はなかなか元にはもどらないようです。

近年は親水空間の整備が叫ばれ、いたち川も河川公園としての整備が進み、遊歩道や並木、いろんな花木の整備が行われ、それなりに都市生活のいこいの場となってきています。

しかしかつての子供達と川とのかかわりは失われてしまったままです。子供が川遊びのできる整備の方法も考えていく必要があると思われます。

それと同時にかつての豊かな生物相が少しでももどってほしいものです。

今度の調査で湧水のあるきれいな川にしか住めないトミヨが記録されたことにたいへん驚きました。30年前にも見なかった魚が少数ながら住みついていて深い感動を覚えます。

生物が住みうる環境をつくってやれば、いたち川が昔の豊かな姿を取りもどすことも可能であると思われます。

「この小文を書くにあたり、堀田義治さん、長澤英明さん、吉田信さん、岡島和彦さん、佐竹清澄さんから昔のお話を伺い参考にさせていただきました。」

(こばやし ひでとし 富山市豊川町)

## 標本の名前を調べる会 (標本同定会)

夏休みなどに採取した岩石・化石・貝・昆虫・植物そのほか生物や地学の標本の名前を調べます。

開催日時：8月28日(日) 10時～16時

